

長寿が男女の生き方を変える

樋口 恵子

皆様、こんばんは。私は、この（2012年）5月で満80歳になりました（拍手）。少し前までは年を隠したかったけれども、こここのところ年齢自慢から話を始めるようになりました（笑）。

とくに私は3年前、九死に一生というほどではございませんけれども、死んでもそうおかしくはないという病気をいたしました。いろいろなことを考えました。お医者さんだったら、この病気の深刻さをわかってくださいますが、「胸腹部大動脈瘤感染症」という病気

になりました、おへその周辺の瘤（こぶ）（大動脈瘤）を3つ取り、人工血管に置き換えるという大手術をいたしました。ちょうど5月（2012年）で丸3年を経たところでございます。

そういうことから、やはり「健康」というものについて本当に考えましたね。それまでは、わりと健康に無頓着でした。「健康、健康」と、健康が生きがいそのものになってしまっているような、そういう人たちを、ちょっと斜めから見えていました。自分がしたいよ

うにすればいいと思って。いまも太っていますが、もっと太っていたし、明らかにメタボでした。本当はやはり、50代の代謝の仕方と、70代の代謝の仕方は違うから、食べ方も少しは控えて、運動も意識してしなければいけない。娘は医者ですから、文句を言うわけです。「もうちょつと節食しろ」とか、「運動をしろ」とか、「そんなものばかり食べるな」とか。そうすると、「うるさい！」と私は言うわけです。そして、「自分で働いて、自分のお金で食べて何が悪い！ 死んで持っているものは食ったものだけだ！」と（笑）。

そんなことを言って娘とケンカしているうちに、病気になるって、まあ、3つ瘤を取って、いったん7キロ痩せて2キロのリバウンドをして、差し引き5キロ痩せて定着しました。だから、大太りから小太りになって、これが本当の「瘤取り（小太り）ばあさん」（笑）。そうしたら、どうなったと思いますか？

これは50代から体重が増えすぎたせいもありますが、「変形性膝関節炎」というのが固定化しておりまして、ある時間、立ち続けていると膝が痛かった。まして、

階段を下りるときなどは、かなり苦痛です。ところが、こうやって立っていられるぐらいに膝が楽になりました。体重が5キロ落ちると、どんなに楽になるかと思ひ知りました。

80歳で北欧へ視察旅行

手術から1年目は半死半生。2年目によくやぐ人心地がついて、3年目は割と元気になってきた。それで、もう生涯行かれないと思っていた海外旅行へ行こうと決めました。どうしてもエコノミー症候群にかかりやすい体質になっていますから、韓国・中国などアジアはともかく、フライト時間が10時間前後というアメリカやヨーロッパはあきらめておりました。そして、何か行けそうな感じになりましたので、主治医に聞いてみると、検査結果を見ながら、「いま、特にお止めしなければならぬ積極的理由はありません。しかし、樋口さん、80歳ともなれば飛行機の上で亡くなってもどこで亡くなっても、不思議はないのです」。普通の人でもそうだというのなら、「じゃあ、行ってこよう」と

思って、この5月、遂に決心して、北欧に行ってきました。

実は、人間の最期の看取りについて考えていまして、よい生き方の末に安らかな、できれば自然な死があつてほしいと、宗教的な理由ではなくて一人の平凡な人間として私は思っています。では、諸外国はどうなの？ふとそう思つて、OECD（経済協力開発機構）の調査を見たら、「終末期の医療世界一」というのが何とイギリスです。特に、痛みのケアとかそういう分野が大変よくできているらしいです。ですから、イギリスへ行こうかと思つたけれども、ロンドンオリンピックの前ではありませんか。あまり雑踏の中に行くのもいやだと思つて、もうちよつとなじみの国でどこかないかと思つたら、5位にスウェーデン。フィンランドもその前後にあります。では、4度目の訪問ではあるけれどもスウェーデンと、初めての国フィンランドの両国へ行つてこようと思つて、行つてきたわけです。

行つてきて、どうか。私は80歳になつてこんなに心ときめくとは思いませんでした。どなたかが「ときめ

くと長生きする」と言っていました。が、「もう、だめだ」と思つていた海外旅行、それができるのですよ。飛行機の客席に乗つて、それがまた私の誕生日の翌日です。ちようど、80歳の初日ですね。成田周辺のあの関東平野も、空から見ると実にきれいです。前々日ぐらいに雨が降つて、緑は本当にしたたるようであり、その緑を後にして私の飛行機は大空へと舞い上がつて行つたのであります。そのときの、思いがけない胸のときめき（笑）。だつて、同行の仲間は我が「高齢社会をよくする女性の会」の副理事長をはじめ、大幹部5人です。平均年齢77歳。だから、周りにいるのは、ふだん見慣れたおばあさんばかりで、別に心ときめくような男性がいるわけではないのに、私は本当に胸が躍りました。「また行かれる。まだできる」と。

私は歌心などまったく無い無粋な人間ですが、母が少し詠みましたので、小学校のころから短歌の宿題などが出ると全部母親に下請けに出して。いまだから白状しますが、結構いい点をもらつていたという本当に悪い生徒でした。それでも、日本人の「三十一文字」

というリズムが体の中に入っているのでしょうかね。

思いがけず、歌がパパッと出てきたんですよ。「緑燃ゆ陸を離^{おが}りて 空を行く 八十路^{やそじ}の初日 心躍るも」というような（拍手）。ちっともうまくないけれども、思いがけず10首くらいズラズラッとできて皆に自慢したりしました。今度は、帰って来るときに、メンバーに「樋口さん、帰るときの感想の歌はどうなの？」と言われて、「おお、できましたとも」。「八十路の初日 心躍るも」と言っていたけれども、3年前の大病を経た80代の旅行はどうだったかという、「されど八十路 常^{おきふ}の起伏しままならず 立てばよろめき 座ればため息 歩く姿はボケの花」（笑）。

「初めは短歌で、終わりが都々逸^{どといつ}になる。樋口さんらしくて、よろしい」。つまり、80歳の私の健康状態というのはこんなものでございます。肺活量だけではなくて、心肺機能も同一年齢・同性の平均の7割ぐらいしかございません。ヒヨロヒヨロして、「立てばよろめき 座ればため息」。でも、いいんです。それだって、見るべきものは見ているんですから。

「人生100年社会」が到来

ということで帰ってまいりまして、そのご報告は後ほどいたしますが、少し前から私たちは「人生100年社会」と言っております。人生100年、90年。人生80年は少し前に定着しています。さらに、少し前は「人生50年」でした。明治生まれの私の親たちは「人間50年、人生50年」と言っておりました。それが、こんなに延びた。

ハーバード大学の人口問題の大先生、P・バーマン教授。人口学の最高権威の人ですが、こう言っております。「20世紀後半でいろいろなことが変わったけれども、何より大きい変化は先進国を中心に長寿の普遍化が達成されたことだ」。学者ですから「長寿の普遍化」と難しく言っていますけれども、平たく言えば「長生きする人が増えて多数派になる」。もうちょっと正確に申し上げますと、ここに含まれる国は、第2次世界大戦が終わってからの先進国だけです、いまのところ。これから全世界的に広がっていくと思いますけれども、ともかく「人生100年社会」などと仮にも言えるような、



「長寿を喜べる社会」を皆で築きましょう——講演する樋口氏

長寿の普遍化を獲得したのは、つい近ごろの先進国です。

昔から、80歳、90歳まで生きる人はいましたけれども、それはまれなことでした。いまは、多くの人が65歳を過ぎる。70歳、80歳はまったく珍しくない。90代だって珍しくない。私は『現代用語の基礎知識』という本の高齢社会の欄を担当していますが、今年は一項目、新語を入れました。「90代女性ブーム」。評論家の吉沢久子先生、94歳。笹本恒子さん、報道カメラマン、98歳。料理家の岸朝子さんは89歳、詩人の柴田トヨさんは101歳ですが、そういった90代の女性で活躍している方が、たくさんいる。その本がまた売れる。中身はというと、ご自分の日常、健康法、どう生きているかということですけども、これが売れに売れています。今年は、90代の女性の年です。

実は、私たちはすでに20年前に、長寿の女性がもてはやされたことを覚えていると思います。「きんさん・ぎんさん」ブームですね。私も60代半ばぐらいのときに、名古屋での私どものNPOの大会に、きんさんを

お招きすることができ、光栄にも、そのとき103歳ぐら

いでいらした成田きんさんのお話し相手、インタビュアーをさせていただきました。あのときも、きんさん・ぎんさんのキャラクター、面白くて、明るいお人柄から大変なブームになりましたけれども、その末っ子ぐらいに当たる我々の世代とか、もっと若い方を含めて、どういう目で見えていたかというと、そう言っては失礼だけれども、「めったに見られないものを見る」という感じでしたね（笑）。本当に失礼ですけれども、そういう思いがやはりあふれていたと思います。それに引きかえ、いまの90歳を超えて活躍する方々を見る中高年のわたちの眼差しは、健康で素敵な女性たちの生き方として、自分の未来を重ねて見えています。90代を生きることがはもう、特に女にとってはまったく珍しくなくなりました。

男の方のために申し上げると、たしかに平均寿命は男のほうが短い。しかし、健康寿命、元気に生きる比率は、くやしいほどに男のほうが高いです。去年は、日野原重明先生が「100歳で現役のお医者さん」という

ことで、注目を浴びましたね。

私もいつ死ぬかわからないけれども、時間があつたら、健康寿命の男と女の差をどうすれば埋めることができるかに取り組みたい。そして、男の方は頑張つて男女の7歳近い平均寿命の差を埋めていただきたい。一方、なぜか90代過ぎまで長生きすると、我ら女性のほうが早く弱ります。だから、90代の元氣な女性は、私たち女性にとって、ひとつのモデルです。

女性の人生が急激に変化

いまの80歳の私たちと100歳の女性では、食べ物はじめ社会的・生活的条件が、ちよつと違うかもしれません。我々も差別されたけれども、いまの100歳の方はなおのこと。ごちそうは男の子優先。「女の子は、魚なんか食べなくてもいい」と尻尾のほうだけ。そういうような食べ物の差別が、まだまだ100歳の方の子どものころはありました。我々の世代でも、私は兄と二人きょうだいで、魚をふたつに切ったとき、頭のほうは兄、尻尾のほうは私、その程度の差別でした。私は、「尻

尾のほうが食べやすくいいや」と思ったぐらいでした。

それから、いま100歳の方と80歳前後の人とでは、学校への行き方が違います。100歳の人は、どうかすると、貧しければ「おしん」ですよ。義務教育を全うできなかった。まして、女学校へは2割ほどしか上げてもらえなかった。それが、我々の世代になると小学校6年以上の教育を受ける人が多数派になります。例えば、小学校の高等科（2年制）へ行く。もっと恵まれた人は高等女学校へ進む。女学校では、体育・体操という授業があります。体を鍛えるという女の子への教育というのが、やっといまの80歳前後ぐらいから普及しているわけです。ここから先は、家事労働も軽減されていた。洗濯を、立ってできるようにになった。たらいにしゃがんで家じゅうの洗濯をする時代と、立ってポタポタとついで洗濯する時代とは、大変な違いです。

私は小学校6年生で集団疎開のため長野県へ行きました。温泉には恵まれ、宿泊は元ホテルで、そういう意味では集団疎開天国だったと思います。ちっとも寒

くなくて。しかし、5年生、6年生の女の子は「敷布は自分で洗いなさい」と言われました。一方、男の子は寮母さんが洗ってくれるわけです。人生初期の「差別」への認識ですね。お湯だけはふんだんに出るけれども、道具は洗面器しかないのです。石けんは自分のものを使いましたが、洗面器の中で6年生の女の子がシーツを洗うというのは、本当に悪戦苦闘でした。もう、のたうち回って、半日かかってろくに洗えなかったと思います。私はそのときに「女の家庭生活がこの洗濯に耐えなければいけないなら、私は結婚しない」と心に誓ったのです。それまでは勉強より遊ぶほうが好きな女の子でしたが、以来、「少し勉強して、結婚しないですむ女になろう」と決心して、やってきました。それが豹変したのは洗濯機が出たからです。

昭和31年に大学を卒業しましたが、昭和30年代前半というのは、「三種の神器」と少し後に呼ばれた「洗濯機・冷蔵庫・テレビ」が出回り始めたころでした。一番初めに、やはり洗濯機が出回りました。そして、卒業の翌年、私が結婚するときには、洗濯機が買っても

らえる状況になっていました。そんなに大金持ちでなくても、いわゆる中流といわれる家庭の嫁入り支度に洗濯機が入り始めたのです。だから、洗濯機があったからこそ私は結婚したのです（笑）。本当にそうなんですよ。

人生のどこで家庭生活の電化器具が入ってきたかを調べてみますと、これもまた面白いのです。いまここにいらっしゃる方々は、「家事が重労働だった」といわれた時代から解放されて生きている世代だと思います。でも、私どものちよつと上ぐらいまでは、家事というのは重労働だったわけです。栄養もよくなかったし、女の仕事は全部、腰をかがめる仕事だった。かまどの前でご飯を炊き、たらいの前で家じゅうの洗濯をし、風呂場の前で薪をくべて風呂を炊き、あらゆることを腰を曲げて行う労働で、だから女の腰は早く曲がるのだという説もあつたぐらいです。いま私たちは、そういう事実から解放され、男女ともどもに寿命が延びる社会を享受しながら、いまここに生きています。

先ほど、「第2次大戦後の先進国で、初めて長寿の普

遍化が実現した」というお話をしましたが、「人生100年」というスパンで自分の生き方を考える時代になりました。それまでは、先進国も大体「人生50年」だったのです。平均寿命で見るとらばの話です。つまり、長生きする人が少なかったというよりも、昔は乳幼児の死亡率が非常に高かったもので、低いほうに引つ張られました。昭和15年の日本人の平均寿命は、男子が46・9歳で、女子が49・6歳でございます。ですから、大体、戦前の日本人は「人生50年まで生きなければ、早死にだ」と言えるところまで生きていたわけですが、あの戦争の惨禍で、日本人だけでも30万からの方が亡くなりました。

戦地へ行く若い男性を中心とした兵士だけでなく、広島、長崎の被害もあり、東京大空襲だけでも10万人以上が亡くなっております。沖縄戦での20万人以上といわれる犠牲者は、民間人と軍人とがほぼ半々です。これらの場合、老若男女がともに亡くなっています。昭和20年の平均寿命は何と、男子23・9歳、女子37・5歳という無残さです。

長寿こそ「平和」と「豊かさ」の成果

ですから、私がきょう最初に申し上げたいことは、「長寿を喜べる社会をみんなで作ろう」ということです。

たしかに社会保障はいま、はっきり言ってこのままいけば破綻するだろうというところにあります。よっぽど急に景気がよくなることがあれば話は別ですが、なかなかそういうことは望めそうもない。年をとればとるほど、医療費はかかります。厚生省がつくったデータですが、大体我々は一生に2千万から3千万円ぐらいの医療費を使うそうです。そのうち、70歳までに半分ほどしか使っていないのです。70歳を過ぎてから——いくら長寿になったといっても100歳まで生きる人は、そう多くはいませんから——つまり平均寿命からいえば、その後、15年から長くて20年の間に、医療費の半分を使うということです。ですから、長寿というのはたしかに社会的コストがかかります。それやこれやございまして、年寄りばかり増えたらこの世の中が

つぶれるとか、そういう論調が、このごろ少しあります。新聞の一面の下欄に書くコラム、どこの新聞も腕達者が書いていますね。ある著名な新聞でしたけれども、私は、「ちょっと、これは抗議しようかな」と思ったら、他の人が抗議してくれた。そのコラムは「古い木が茂りすぎると、新しい木が育たない」というのです(笑)。「老木がはびこると、若い木が育たない」というような趣旨で書いていました。現実には介護に費用がかかり、高齢者のほうが医療費を使うことは確かです。ただ、だからといって「年寄りが生きていることが、若い世代の邪魔だ」なんていうのはおかしい。

私は、本当に無駄が多い社会は、短命社会だと思っております。戦争のある社会だと思っております。第2次世界大戦で、平均寿命があんなに下がるぐらい、大勢が亡くなった。それは年寄りもたくさん死にましたけれども、何といっても一番死んだのは若い男性です。長い人生を前にして若い人が理不尽に大量に死ぬ社会、こんな無駄な社会がありますか。

また、戦争がなくても、例えば、私と同年の19

32年生まれの人、その前後の人は皆そうですが、当時は、生まれて1年間に1割の赤ちゃんが死んでしまっています。驚きますね。10人に1人が、誕生日を待たずに死んでしまうのです。それを過ぎて、また死にます。疫病、赤痢、百日咳、ジフテリア、猩紅熱。もう、病名すら日常のボキャブラリーにないような幼児期の病気がたくさんございまして、私はたった一人の姉の顔も知りません。このような幼児期の感染症で死んでおります。

それを通り越すと、さらにまた大きな関門が待ち受けております。思春期・青春期を襲う、国民病といわれた結核です。私は兄をその結核で失い、私も感染して、学齢を1年遅れております。1年半の休学で、からも生き残ったのです。

つまり、貧しい社会というか、医学の発達しない時代は、大変な思いをして生んだ子どもの1割が誕生日を待たずに死んでしまう。幼児期・少年期で死んでしまう。特に青年期の結核は、20代いっぱいぐらいを襲う病気でしたから、教育費もかけ、前途洋々たる若者

たちが多く死んでいきました。こんな無駄な社会があるでしょうか。

いまだきは、生まれた人の大半が65歳を超えることができるようになってきております。こんな良い社会はないです。こういう良い社会は、2つの条件が満たされないと絶対にやってきません。ひとつは平和であるということ。長寿は平和の証^{あかし}です。特に、若者を中心とした理不尽な死が世の中に蔓延するような社会では、絶対に平均寿命は上がりません。もうひとつは、一定程度豊かでない^と長寿社会は来ないということです。HIVエイズに5人に1人が感染するということ。HIVエイズに5人に1人が感染するとい、つような社会もあります。先進国は平和の中にいて、つような社会もありません。サハラ以南のアフリカの国々やアフガニスタンなど、いまでも平均寿命が40歳代の国があります。部族同士の抗争や、貧困や、不作や病気、そういうことの結果ですね。大勢生まれて大勢死んでいきます。こういう事実を私どもは忘れてはならないと思います。また、私たちの国際協力というの、まさにそこに焦点を絞らなければいけないと思っており

ます。解決しなければならぬ問題というのは、そういう短命をもたらす状況のほうであって、長寿というのは平和と一定の豊かさが普遍化して初めて到達した素晴らしい成果なのです。平和と豊かさというのは人類が永らく願ってきたことであります。いま大切なことは、これをもっと広げていくことです。

日本は実は少子化が行き過ぎてしまつて、これがまた問題ですが、少なくとも、死ぬ分まで計算に入れて大勢生まなければならないという社会からは解放されました。女性の地位が、ある程度高くなり、教育水準が高くなると、一定の割合で少子化と長寿化がセットで進んでいきます。日本は、その途中がちよつとうまくいなくて、少子化が行き過ぎてはおりますけれど。というわけで、私たちはまず何よりも長寿を祝いたいと思っております。

高齢化社会の「祝福と挑戦」

国連は「国際高齢者デー」という行事をきちんおこなと行っています。10月1日です。毎年、この日に、国連の

人口開発基金（UNFPA）などが担当して、世界の高齢社会白書を発表しています。今年、国連はその発表の最初の場所を日本の東京に選びました（※報告書「21世紀の高齢化…祝福すべき成果と直面する課題」を発表。いま日本が世界一の高齢社会で、平均寿命は、昨年の震災の影響もあつて少し落ちましたが、ほぼ世界一に近い。高齢化比率は24%を超えて、これは真正正銘の世界一。高齢化のスピードも世界一です。そして、経済が大変な中から介護保険もつくり、さまざまな保健・予防の方法を考え、地域で老いを支えていくという取り組みを、いろいろ提案している。世界的に注目を浴びる高齢社会なのです。その日本に敬意を表して、高齢白書の最初の発表の場に国連は日本を選びました。白書の中身は、これから先進国だけでなく、アジアを含めた中進国、途上国がますます高齢化していくときに、私たちはどうするべきかという議論です（※報告書によると「2050年までに世界の高齢者の80%が途上国で暮らすことになり」「2050年には、60歳以上の人口が15歳以下の人口を上回る」）。

報告書（英題「Ageing in the Twenty-First Century: A Celebration and A Challenge」）のサブタイトルが気に入りました。

「セレブレーション・アンド・チャレンジ」です。セレブレーションというのは祝福、チャレンジというのはどう訳してもよくて、日本語のチャレンジのままでいいですが、「課題」と訳してもいいし「挑戦」と訳してもいい。つまり、この長寿社会は何よりも祝福されるべきである。しかし、いままで長寿社会ではなくて短命社会だったのですから、いろいろなものが変わって、新しい課題がたくさん出てくる。それに果敢に挑戦していこうではないかということでございます。私は、この「祝福と挑戦」という言葉を皆様とともに抱きしめたいと思っています。

「過ちを伝え得る時間」をもった初の時代

私は、こうも思います。もしかしたら人間は、これまで複雑な性格のわりには短い平均寿命しか与えられなかったからこそ、過ちを繰り返してきたのではないだろうか。あの、たび重なる戦争。そこに象徴される

さまざまな諸悪といったいいのでしょうか。こうした過ちを次の世代に語り伝えていくには、時間がかかるのです。

人間というのはとても複雑な性格をもっていて、過去にあった非常にひどい体験を心の中で整理して、「これは大きい声で言ってもいいか、言っては悪いか」、あるいは「このことを人に告げていいかどうか」。これを整理するのに、とても長い時間のかかる動物であり、そういう社会に生きていると思います。

例えば、の中にはDV（家庭内暴力）の専門家もいらっしやると思いますけれども、虐待されて育った子どもが、その事実を認め、「だから、こうなったのだ」と納得する。これはそう簡単な時間ではできません。たくさんさんの時間、たくさんさんの助言が要ります。「これは『不当なことだった』と言っていいのだ」と納得できるまでに時間がかかるのです。

もっともっと小さな、ある意味でハッピーな人間の感情だって、長い時間をかけないとわからないことがありますね。私も本当に、40年ぐらいかけてわかった

ことがありました。

個人的なことになりますが、私は兄と二人きょうだいで、兄が私にいはるんですよ。頭も顔も兄のほうがずっとよかったから、父にかわいがられました。そして兄は、私の顔が「まずい、まずい」と言う。いじめですよ。父や母はそんなに変な人たちではないですが、私が「あまりひどいから、言わせないようにしてくれ」と言っても、父や母は兄がかわいいから、「ふざけているだけだ」と言います。いじめについて、よく「ふざけ合っているのだ」と言われるのと同じですね。でも、こっちは、ズシーンと傷ついていますよ。本当に、毎日毎日、言われて。父は学者でしたから、お弟子さんがよく見えますが、父が兄を溺愛していることを知っているものだから、お弟子さんまで「先生、坊ちゃんとお嬢さんと、せめて顔だけでも変わればよかったのに」(笑)。本当にもう、名前も覚えていますよ、その学者の(笑)。

私は兄がうらやましかったけれども、頭の出来の違いも、顔の出来の違いも歴然としていましたから、ひ

がむこともなかったですね。「これは仕方がないのだ」と思ってた。ただ、その後、兄は——特に小学校中学年から高学年ぐらいになるころ非常にはつきりしてきましたが——私へのいびり方が何かちよつとニュアンスが違ってきたんですね。ただ弱い者いじめをしているのではなくて、どこかに嫉妬の感情が働いていた。私は「何よ、これ」と思ってたね。だって、こっちが嫉妬するのが当たり前で、比較にならないと思うから嫉妬もしなかったわけですよ。ところが、その兄貴が明らかに嫉妬している。その兄は15歳で死んでしまい、私は、そのことはすっかり忘れていました。

ある日、何かの取材先で、その家の小学校3年ぐらいの男の子が、母親の膝に乗ってくるわけです。ふつう3年生といったら、もう膝にはあまり乗らないですよ。お母さんは「みっともない、お客様の前で」と言いながら、「この子は、妹が生まれてしまったものですから、ある時期からすぐ母親の膝を恋しがるようになってしまったんですよ」と言われた。そのときに、あの憎き兄の顔が浮かんだわけです。

兄が物心ついて、チャホヤされた一人息子そのものだった時期に、私が生まれてきました。いくらへちゃんな女の子でも、女の子は女の子なりの存在理由があるわけです。兄は早くから「学者になれ」と言われて書齋を与えられ、そのかわり家族の女たちとあまり戯れることもしませんでした。母さえちよつと氣を置いている感じでした。兄を「書齋の貴公子」とするならば、私は「庭先と台所のアイドル」(笑)。本当にそうだったんですよ。そういう意味で、兄よりも、おそらく、ぼたもちの1つか2つを多くもらう。出入りの人たちに頭のひとつも余計に撫でてもらい、結果として、私はチャホヤと、にぎやかに育ったと思います。

思えば兄は、私に奪われた母の膝が恋しかったのではないのでしょうか。いくら超然とした貴公子に見えても、やはり子どもは子ども。5歳の少年は5歳の少年です。出入りする女たちにチャホヤされる人生も、うらやましかったのだと思います。学校へ行きましたら、私はこんな性格でありますから「友だち百人いる人生」をずっと送っております。兄は、親しい友人は何人

かおりましたけれども、学友の中で超然としていた。ある意味で、寂しかったと思います。

それで、小学校5年ぐらいでしたか、勉強の出来は兄のほうがずっと群を抜いてよかったし、私は、その他大勢なのですけれども、だんだん学年が進むと私も少しずつできるようになりました。そうすると、兄は先生から「おまえ、このごろ妹のほうの評判がいいぞ」なんて言われた。すると兄が「あれは社交界の女王です」(笑)。「よくそんな言葉を知っていたな」と思うのですが、要するに、にぎやかで平凡にワイワイと暮らした母親の膝は生まれたときから独占している私が妬ましかったのでしょうか。

そのとき、私は40歳ぐらいになっていましたが、やっとわかりました。ですから、容貌をけなし続けた憎き兄であるけれども、あの世へ行ったら、「あなたも結構、苦勞があつたんですね」と言おうと思います(笑)。このようにささやかな、ごくハッピーな家庭の小さな出来事のようにでも、他者の心の傷につくことは難しい。気がついていたら私も何か言っちゃったのです

が、気がつく前に、兄は逝きました。そういうことが、人間社会にはあるのです。

まして、戦争です。戦争の中で多くの人が傷つきました。身も心も。いま私は、引き揚げの途中で妊娠してしまった人たち、その悲劇をしっかりと記録しておきたいと願っております。でも、その人たちから直接話を聞くことは絶対に不可能だし、私も聞くことも思っておりません。ただ、そういう事実を、戦争の惨禍、特に女性における最もひどい惨禍として、きちんと伝えたい。そういう私の思いが身の周りの世の中に伝わりまして、3、4年前、仙台の産婦人科のお医者さん、戦争当時は九州大学の若き助教授だった方にお会いできました。戦争が終わって、中国東北部から九州へ、そういう被害にあった女性が引き揚げて来られるわけです。これは事実だから申し上げますが、ほとんどソ連兵に暴行された女たちです。それで妊娠してしまつて、帰って来て中絶手術を受けた。当時は刑法に「堕胎罪」があつて、本当は有罪になるところを特例で認められていたという話もあります。この辺のところは、

もう少し調べてみなければわかりません。

その先生が、いま東北で生きていらして「いまなら話せる」というので、私は飛んで行きました。先生は、初めは「みんな忘れた」とおっしゃっていましたが、私が調べたことをポツポツと申し上げますと、先生は96歳か97歳でしたが、おつむはかなりしっかりしていると言います。「ふん、よく勉強しろ」と言ってくださつて、ポツリポツリと話し始め、書き留めていたことも教えてくださいました。そして、話し終えて、この先生は1週間後に旅立たれました。

私は、こういうことは記録しておかなければならないと思います。しかし、そういう無残な記憶というのは、なかなか言えないのですね。例えば、沖縄の「ひめゆり部隊」の生き残りの方々です。あの女学生の死亡率は高く、100人のうち10人ぐらしか生き残っていません。そして、その人が悪いわけでも何でもないのに、「自分は生き残った」というだけで罪悪感をもっておられるわけです。この方たちが、やがて「ひめゆり平和祈念資料館」(1989年開館)を建て、みんなの前で話

ができるようになったとき、戦後もう40年が過ぎていました。原爆の被害だって、生き残った人たちがきちんと話をするのに20年、30年が経っています。まして、従軍慰安婦と言われる人たちが言葉に出すまでにどれだけの時間がかかったことか。

私は子ども心に、「男の人は『戦争に行ったら真つ先に死ぬ』と言われても平気で、強いんだなあ」と思っていました。ところが、ベトナム戦争から帰って来た男たちは、精神的な障害を大勢の人がもっている。PTSD（心的外傷後ストレス障害）という言葉は、そこからやっと、われわれ素人にも広がったわけです。前線に立たされ、「殺らなければ殺られる」という状況の中で、人を殺したりした経験というのは、一生を狂わせるような心の傷になっている。そういうことが皆にわかってきたころ、ベトナム戦争終結後20年以上を経ておりました。

ときには、語りたくても、政治的状況が発言を阻むこともあります。何よりも、自分の心の中で「それが何だったか」ということの整理がつくまでには時間が

かかるわけです。長い歴史的な変化の中で、周囲の状況も変わる。「これはあなたのせいではない。あなたがこういう被害を受けたことを言っつかまわないんですよ」と周りが勇気づける。それを受け入れられる社会的状況ができて、まず自分の心の中で整理がつき、そして初めて他者に伝え得る言葉を獲得し、話すことができるのです。いま私たちが、戦後67年の間に徐々に受け止めている戦争の惨禍というのは、こういう順序を経て、私たちみんなのものになっていると思います。

その前はどうかだったか。人生50年でした。戦争の体験も、そこで受けた心の傷も苦しみも、他人には伝わらないまま、多くの人が人生50年で死んでしまった。だから、一体どこでどんな嘆きを受けたか、殺すほうもどんなに傷ついていたか。後の人生が生きられないぐらい、どんなに傷ついたか。そんなこともわからないで、人生50年を終わり、残ったのは記録文書・古文書だけです。

私たちはいま長寿を獲得したおかげで、さまざまなことを、当事者から生^なまの言葉で伝え得る時代を生き

ています。ときには取材者と取材される人であったり、ときには語り部として語る人と聴く人であったり、ひとつの空間で人間としての息づかいを共有しながら、1世紀近い人々の「縦の多様性」を学ぶことができる。昔はせいぜい50歳の人が孫に伝えるだけだったのが、いまは90歳、100歳の人が自分の生まの体験を言葉にして同じ空間で伝えることができるのです。「人生100社会」は何と素晴らしい社会ではないですか。

22世紀か23世紀になったとき、その時代の歴史学者が過去を振り返って、「人間が長寿を普遍的に獲得したあのころから、人間はあまりバカな過ちを繰り返さなくなった」と言われたら、私たちは何と名誉なことでありましょうか。まあ、バカな過ちをまだやっておりますけれども。とはいいうものの、核を落とした国のほうが、「あれは間違いであった」とやっと言うようになりました(※2008年4月、オバマ米大統領がチェコのプラハで、米国は「核兵器を使用した唯一の核保有国」として、核兵器廃絶に向けて行動する「道義的責任」を負うと表明した)。これも、原爆犠牲者の方々が長く生きて、いやが

られながらも、繰り返し繰り返しホワイトハウスを訪ね、生まの姿を見せて語り継いでいった結果だと思えます。長寿社会を寿ぎましょう。人類が過ちを犯さない社会を皆でつくってまいりましょう。これが、人生100年社会の祝福というものと私は思っております。

男女平等にしなければ日本はもたない

さて、祝福すべきもう1点は、「長寿社会は男女が平等にならざるを得ない」ということです(笑)。とてもうれしいことです。だから、私は言いましよう。「男尊女卑が好きな人は、どうぞ、あまり長生きをなさらないことです」(笑)。なさってもいいけれども、結構生きづらいですよ。「生きづらくても、おれは絶対に男尊女卑でいきたい」という人は、これは個人の選択の自由で、人は勝手に不幸になる自由ももっているのですから(笑)、「どうぞ、ご自由に」ということです。

「人生50年社会」と「人生100年社会」は何が変わったか。人生の標準サイズが変わってしまったのですね。MサイズがLLLサイズぐらいになってしまった。そ

うしたら、その中の構造も変わってくるのは当然では
ありませんか。

「男は仕事、女は家事・育児」という性別による役割
分担、性別による分業。これを日本は早急に変えてい
かないと、経済発展も本当にありません。この「男は
仕事、女は家事・育児」という考え方が、世界の中で
も一番ずつと残ってしまった国が日本です。やつと変
わり始めたのが、この10年です。それでも、まだ変わ
らないところもたくさんあります。例えば、国会議員
や地方議員、あるいは職場での収入、職場での地位、
その他、社会的な方針決定の場に女性がどれだけいる
かということを基準にして世界の国を査定すると、135
カ国中、日本は101位だそうです。「社会的地位が高いば
かりが幸せとはいえない」という見方もあることは承
知の上ですが、101位というのは、あまりといえばあま
りの低さではないでしょうか。

だからといって、「日本の女性が不幸か」というと、
意外に幸福感が高いのです。これは、なぜでしょうか？
私は仮説をもっていて、寿命に恵まれたら軽い論文に

書きたいと思っています。「なぜ、日本のフェミニズム、
女権主義は先鋭化しなかったか」。他の国のように、ウー
マンリブの波が急激に広がらなかった。他の国がほと
んど「男は仕事、女は家事・育児」を解消して、男女
の賃金格差などは残っていますが、日本よりはるかに
格差が少なくなつて、女も男も外に出て働いて、子ど
もを生みながら働き続けるというライフスタイルが定
着しているのに、日本はなかなかそうならなかった。

そういう賃金体系を取ったほうが得な企業のせいも
大きいと思います。また、日本は近代化が遅く始まっ
ているので、政権にある人たちの一部の考え方が、「伝
統的」というと聞こえはいいですが、要するに「封建的」
「古くさい」。そういう人たちが結構いるということも
あります。だけど、とても大きな理由は、女性たちが
大きな反乱を起こさなかったからでしょうね。

何で反乱を起こさないか。ここからが私の仮説です。
戦後、日本の女性の地位の向上は、たしかに選挙権獲
得などもあります。が、家庭の中で何が変わったかとい
うと、給料袋の封を切らずに妻に渡す風習が一挙に広

がったことです。つまり、月給分ぐらいの金銭の日常の管理権を妻が得た。これが大きいと思っています。この管理権をもつてしまうと、やはり心地いいですよ。私が少し女性問題を勉強するようになって、1970年代以降、アメリカやいろいろな国へ行き、本当に腰を抜かしたことがあります。例えば、北欧観光地のパスツアーで、アメリカの経営者だというお金持ちそうなお夫婦と親しくなりました。日本へも来たことがあるそうで、ちょうどアメリカは大統領選挙の年でした。夫婦で支持政党が違って、奥さんのまあ雄弁なひと。旦那はタジタジで、完全に言い負かされています。1980年ごろですから、そのころの日本では、まだ我々の世代の中年夫婦は、奥さんがあまり滔々と政治論なんか人前でできませんでした。やったとしたら、旦那がたしなめましたね。「女のくせに」とまでは言わないけれども、「あんた、そんな偉そうなことを言つて」とたしなめましたよ。ところが、アメリカでは全然そうじゃなくて、旦那を押しまくっているわけです。

ところが、観光先の公園に着いて、私が「絵ハガキを買いいたいから、ちよつとごめん」と言つて行こうとしたら、その奥さんが「私も買いいたいから」と言つて引き止めるのです。そして、ニッコリ笑つて、夫に「私、絵ハガキを買いたいの。お金ちょうだい」。これは、本当にカルチャーショックでした。その後、調べてみると大体、そうです。個人主義が徹底していますから、夫は「おれの稼いだものはおれのもの」です。奥さんは他のことではいばつていても、こと経済に関しては夫の管理権の中にあります。クレジットカードも、ウーマンリブの活動までは主婦はなかなか持てませんでした。日本でも、家を買うというようなときは夫が出てくるにしても、日常生活の管理権は女性が手にしている。皆様あまり思っていないでしょうけれども、これは実は快い感覚ですよ、本当に。私も新婚時代から給料袋を渡してもらいました。まず「封を切らずにくるか」ということに監視の目を光らせて（笑）。なかには「給料袋を破つて、小遣いを抜いてから渡す」と偉そうに言う男もいて、そういう風潮が少し広がっていたの

で、私の夫がそういう悪い風潮にかぶれていないか。私はしっかりと給料日を待って、彼が封も切らない真新しい給料袋を差し出すのを見て、「よろしい」と心の中でうなずいたのでありました（笑）。そして、給料袋を切って、「あなた、お小遣い」。あのころは2万円ぐらいだったかな。「2万円でいい？」とか言ってあげて。それからの管理権は、絶対に私のものです。

電車の中で、ボーナス時期なんかが近づいた若奥さんたちの話に耳を傾けていると、「今度ボーナスもらったら、主人に背広つくつてあげようかしら」（笑）。「何々を買ってあげようかしら」。誰が稼いだ金だ（笑）。欧米社会の個人主義から見たら、ちよつと考えられない話ですね。私は、それこそが意外や意外、日本の女性の幸福感を支配してきたのではないかと思うのです。

買い物は、ときに気晴らしにもなります。くさくさしたときに、3千円のストールを買ったときの解放感。3千円ぐらいなら日本の奥様方は、いちいち夫に告げる必要はほとんどなく自分で裁量していると思います。しかし、個人主義の国ではそうではないです。ですか

ら、実は欧米諸国のウーマンリブ、女性解放運動の広がり方と日本の差は、そのような財布の握り方にもあったと思っております。

これは男女という横の話ですが、農家とか、三世代、四世代一緒の家庭だと、どの世代が財布を握っているか。つまり家計の管理権をもつかどうかで、やはり生きがい随分違うようです。「もうそろそろ息子に渡さなければいけないけれども、財布を渡してしまうと楽しみがないからなあ」なんて言っている農家の親父さんに会いました。いまは年金があるから、100%渡さなくてすむようになってる。これもとてもいいことで、家族の風通しをよくしていると思います。「少年よ、大志を抱け」と言ったのは、クラーク博士でありました。「少年よ、大志を抱け。少女も大志を抱け。中年男よ、妻子を抱け」、家庭を大切にせよ。そして「老年よ、財布を抱け」というのが私の提案です（笑）。やはり、ボケないためにも、一定の金銭の管理権、財布を握るのは大切です。

日本の女性が、先鋭的なフェミニズムに飛び込まな

かったのは、こういう戦後の摩訶不思議な財布の在り方が大きかったと思います。そのおかげで男も結構、楽はしたんですよ。給料が安いのも、なかなか家が建たないのも、貯金が貯まらないのも、みんな女房のせいになってしまったという面もあります。しかし、そのかわり男は仕事に邁進し、日常の家事・育児、それから買い物、そういうこともみんな女の役割にしてみました。このことが、いま実は男性にとっても大きなマイナスになって戻ってきています。

「男性よ、食習慣を女性化せよ」

日常の買い物をすることで、女性たちがどれだけ心を解放されているかわかりません。福祉の世界では「自己決定権」などと難しい言葉を使いますが、買い物というのは究極の自己決定権の行使です。青菜をひとつ買わねばならない、スーパーへ行つて、小松菜か、菊菜か、ほうれん草か、はたまた別のものか。鮮度や値段を見比べて……「これ!」。これが決定権です。「これ」と決めるときの、誰にも左右されない方針決定権。冷

蔵庫の残り物と照合しつつ、きょうの夕飯のおかずを決める。これも方針決定権。これをやるかやらないかが、実は健康寿命に大きな影響がある。ここから先は、もう本当に医学的知見であります。

例えば、いま神奈川県立保健福祉大学の学長をしていらつしやる中村丁次先生。栄養学の有名な博士です（日本栄養士会会長）。この方が、「どうして男女の平均寿命がこれだけ違うのだろうか」ということに着目しました。ご専門の食生活からアプローチして、食生活をずっと見ていったら、女のほうが長生きしそうな食習慣が10項目あるそうです。そして「男性よ、食習慣を女性化せよ」という内容の本を書いていらつしやいます（『女はなぜ男より長生きなのか——臨床栄養学が教える食習慣女性化10か条』はまの出版、1998年）。

（※①女房、子どものメニューに合わせて、好き嫌いく何でも食べる②アルコールはほどほどにし、趣味や買い物でストレスを発散する③しょうゆや食卓塩をやらとかけない。むしろかけないことに優越感を感じる④宴会や付き合いを控えて、できるだけ家庭で食事

をする⑤ヘルスメーターに機会あるごとに乗り、いつもダイエットのことを口にする⑥スーパーにこまめに買い物にいき、ときには自分で料理をつくる⑦まわりの人と一緒に、おしゃべりしながらゆつくり時間をかけて食べる⑧食後、すぐに寝ころばないで、あとかたづけをする⑨食品や料理に関する本を読んだり、料理番組を見て、この方面に強くなる⑩女房の健康を心配し、いろいろ小言をいう

まあ、ここで10項目語っている時間がありませんから、私の最も好きな3項目をいうと、ひとつが「買い物」です。要するに、男は買い物に行かない。日常の買い物によるストレス発散のチャンスが少ない。そして買い物を通して、「献立をつくる」という頭の総合的体操をやっていない。だから、長生きをしたかったら、男も買い物袋と財布を時々女房から取り上げて、「今夜の夕飯は、おれにまかせろ！」と言って買い物をしてこいというのです。

男性の買い物も、いまはだんだん普通になりましたけれども、中村先生がこの本を書いたのは15年ぐら

前でしたから、「デパートの紙袋ならいいけれども、スーパーのポリ袋を抱えていると何だか恥ずかしい」という人が労働組合の青年部長にもいました。私は彼に「時々スーパーへ行って値段も見なければ。何でそれで賃上げの交渉ができるのか」とお説教したら、「僕が行くと、八百屋の親父が『奥さん、病氣?』と言うから、いやなんですよ」と。「何言っているの。コソコソ行くからそういうことになるんです。スーパーで、もしジロジロ見られたら、ポリ袋をパツと差し出して、『これが本当のスーパーマン』と言えばいいんです」(笑)。この労働組合青年部の幹部を含めて、私は、どれだけ男性に買い物に行けと励ましてきたかわかりません。

ともかく、日常の積み重ねというのは大変なもので、そういうごく当たり前の、本当に身近なところでの決定権を使ったり、いろいろ組み合わせさせて料理をする。これは、長い老後に向けて絶対に必要な能力です。男にとっても女にとっても。

中村先生がもうひとつおっしゃるのが、「飲み屋で一杯飲まないで、なるべく家へまっすぐ帰って食事せ

よ」です。やはり酒の肴^{さかな}としては、塩味が濃いほうがいい。おいしい。だから、外で食べたら絶対に塩分が高い。家へ帰って、女房の手料理をゆつくり食べろということとです。

「見慣れた顔の女房と、いまさら話もないわい」「40年も顔を見続けて新鮮な話題があるか」なんて言われるかもしれませんが、意外と女房のほうは話したいこともあるわけです。特に、専業主婦の方は家にいるから、亭主が帰ってきたら話したい。話す中味は、外で働く夫から見るとつまらないことが多いんですね。

「あなた、きょうね、団地の入口の前で猫が死んでいてね」(笑)。「どこから来た猫だと思う?」「知るか」って言うんですね(笑)。旦那もそんな話ばかり聞かされて、黙り込んでしまう。奥様は、舅・姑^{しゅうとめ}と同居しているわけではなくても、いろいろなことがあって、やはり何か言いたい。「きょうはあなた、少し話を聞いて」と言われるから、「うん、聞こう」と言うと、夫の親族のちよつとしたトラブルとか、ちよつとした不満というのはいにくいじゃないですか。だから、話がグル

グル回るんですよ。姑の悪口を言いたいんだけど、「あのね、お母さんはいい方よ。妹のだれ子さんもいい方よ。この間は、こういうふうに関切にしてもらったわ」。なら、何で文句があるのか(笑)。これは前置きなんですよ。「いい方なのよ。でも……」とか言う。「でも」と言ってから、「あつ、でも、この間は一緒に買い物に行って楽しかったわ」とか。もう、夫はたまりかねて、「言いたいことを、簡条書きに書いて持ってきたさい」(笑)なんてことになる、もう、妻のはけ口はなくなってしまうんですね。

年をとって夫婦で一番いいことは何でしょうか。やはり、聞き役になったり、しゃべり役になったり、話し相手がいることでしょうか。「うん」とか「むぐ」でもいいんですよ。「寒いわね」「むぐ」(笑)。「もうちょっと着たら?」「むぐ、むぐ」(笑)。何も言わないよりいいですよ、本当に。

話し相手でなかったら、一緒にいる意義があまりないと思うんですね。さりとて、30年も40年も一緒にいて新鮮な話題がない。どうするか。中村丁次先生が

おっしゃいます。「テレビをつけろ」。子どもがいるころは、「テレビは消して、家族同士でよく話し合いながら食べなさい」なんて言ったけれども、それはまだ結婚十数年ぐらいの、子どももいる時期の話であって、結婚30年、40年、子どもはとうに巣立っていった。そうになったら、もうテレビをつけろ。テレビに出てくる人の悪口を言う。それが一番いいです。だって、夫の親族とか何とかのうわさ話をしていると、うっかりすると悪口になってしまうかもしれない。その点、テレビに出てくる人というのは大体、あまり関係ない。関係ない人の悪口でも言いながら、ゆっくり食べるから健康によろしい。ですから、なるべく早く帰って、女房の手料理で一杯飲みながら、テレビに出てくる人の悪口を言いながら、ゆっくり食べるべし、というのが1カ条です。

もう1カ条は、食べた後、すぐに寝ころぶな。私の死んだ亭主は、他のことはなかなかよかったのですが、この1カ条がだめでしたね。だから、早く死んだと思います。したたかに食らい、したたかに酔う、そして

ボタンキュー。これを男の特権と思っていらっしゃる方もあるでしょうが、これがよろしくないそうです。食後、大して長い時間でなくてもいいから、まあ30分できるだけ地球と直角になって起きているということです。理由は、栄養生理学的にいろいろあるそうです。けれども、ともかくその30分を、どう過ごさせたいか。中村丁次先生の結論は、夫が妻と一緒に皿洗いを手伝うと、ちょうどそれぐらいのいい時間が過ごせるそうです。

ですから、私が男女平等の見地から言うことと、中村丁次先生が男性の寿命を延ばすために言うことと、結論は同じいうことでありました。つまり、長生きをしようと思ったら、男と女の生き方、ライフスタイルはさまざまな意味で近寄らざるを得ないのです。「人生100年」時代は、かくのごとく、ひとつひとつ具体的な意味で、男女が平等にならざるを得ない。

そしていま、もうちょっとアクセルを踏んで男女平等にしていかなないと、日本の国自体、社会保障自体がつぶれるのではないかとこのころにきております。

育児と仕事を両立できない労働環境

↓少子化

例えば、いま日本は男女不平等のせいで、子どもが少なくなり過ぎています。いま世界で出生率が異常なほど低くなっている国に日本と韓国、そしてシンガポールがあります。シンガポールは1・3台を切っています。

シンガポールがなぜこう低くなったのか、ちょっと私には分析できておりませんし、言う資格はありません。実は、この国は不思議な国で、ある意味で男女平等が行き届いています。例えば、知識や技術のある女の人が働きに出ようと思ったら、日本ほど苦勞は要りません。なぜならば、比較的収入の高い高学歴の夫婦の家には、主としてフリーピンから出稼ぎのメイドさんが来てくれるからです。政府がきちんと資格認証したメイドさんです。そのため、シンガポールの中流家庭には大体、そういう人のための部屋がきちんとあります。メイドさんたちが、また至れり尽くせりに子ど

もを育ててくれるそうです。そのようにして育った人がもう2世代目を迎えています。ですから、日本よりずっと気楽に、特に一定の高学歴の人は、子どもをほとんど産んで働き続けられるはずなのに、なぜか低出生率の国のひとつであります。

韓国と日本は、大体事情が似ております。つまり、性別役割分業が根強い。「男は仕事、女は家事・育児」という考え方が強く、女の人の待遇もあまりよくございませので、1人目の出産をするときに仕事を辞めてしまう女性が多い。

ついこの間まで、日本は、第1子を妊娠すると、出産までに7割が仕事を辞めてしまう珍しい国でした。このごろ少し、政府や企業も努力して、7割が6割台まで縮んだようですが、それでもなおかつ、働いている女性が妊娠すると大半が辞めざるを得ない国です。辞めると、今度はまた子どもの学費の問題などがあって働きに出たいのですが、いったん辞めた人が正社員で再就職できるかというと、辞めた人のほぼ1割しかできないといわれます。9割は、非正規雇用です。いま、

日本の女性も本当に大勢働いていますが、正規雇用の人のほうが少ないです。非正規雇用が、大体55%ぐらいでしょうか。半分以上がパート、アルバイト、臨時と呼ばれる非正規雇用であります。女同士でも正規雇用と非正規雇用の格差は大きいし、女の正規雇用者の賃金は男性の大体7割です。なかなか7割までいかなかったのですが、ようやく同じ学歴、同じ仕事、同じ勤続年限ならば、男を100として女は70までいきました。ところが、パートとなると、男の正規雇用に比べると似たような仕事をしていても賃金は50に落ちます。そういう社会です。

つまり、仕事をもつて働き続けることが最も困難な国。就労の状況（労働力率）をグラフにすると「M字型」といって、若いころは働きに出るから高いけれども、妊娠・出産でバツと下がって、その後また働きに出るけれども、実はパートなど非正規雇用で賃金はあまり高くない。それで、また定年を迎えて下がる。このM字型就労が残っているのは、先進国ではいまや韓国と日本だけです。

高齢化と少子化で「介護者が足りない」

というわけで、女性たちは仕事を辞めるのがもったいないから結婚を延ばすようになりました。結婚しても、1人は何とか産めても「2人目はやめようか」というふうになりました。少子化の理由は2つあって、ひとつは今言ったように「妊娠・出産・育児と仕事が両立しにくい」から、結婚してもなかなか子どもを産まないし、産む数が減ってしまう。2つ目の理由は、もともと複雑で、もともと深刻。そもそも結婚しなくなってしまったのです。未婚率が急上昇しています。

だから、「日本の国は変わったか」と言われると、やはり変わったと思います。女性の地位はそれほど向上しないけれども。例えば、私たちが若いころは「国民皆婚社会」といわれて、ほとんどの人が結婚しました。50歳になるまでに、97%が一度は結婚した。離婚したとしても。これは、ヨーロッパ社会などに比べて珍しいことで、「結婚好きな国民」と言われました。一世代しか経っていないのに、いまの50歳ぐらいから、結婚

しない人がグッと増えました。このままいくと、いまの50代が年寄りになるころ、男の20%は独身のまま高齢期を迎えるのではないだろうかと言われていきます。いま私たちが抱えている大介護時代の問題と、またもう一味違った問題です。

生涯独身になると親戚ができません。いまは何のかんの言っても、兄弟がいます。もちろん、いまだって安心できないですよ。私の同級生で認知症になってしまった人がいます。立派な家庭の子どもで、お兄様が3人いて、末っ子のひとり娘で、とてもかわいがられて、高学歴の持ち主です。でも、子どもができなかった。夫も亡くなった。末っ子というのはいいことと悪いことと両方ありますね。子どものころは末っ子でかわいがられて「いいなあ」と思っていたけれども、やはり上から死んでいくわけです。ふと気がつくと、4人きょうだいの3人が死んでしまっていた。田舎と違って、皆サラリーマンです。そうすると、別にケンカしていたわけではないけれども、実の肉親が亡くなると、兄嫁や姪甥たちとも、だんだん疎遠になってしまってい

るんです。

ですから、認知症になってからほぼ4年、私たち中学の同級生3人組が見守ってきました。何とか看てきたのですが、とうとう事故が起こって骨折して入院。立派な姪御さんがいてくださったので、うまく引き継げたのですが、甥や姪といっても、1人のきょうだいに1人いるか2人いるかですから。東京の中でもそうでしたから、地方と東京に離れていたりしたら大変です。

「遠くの親戚より近くの他人」法を

結論を申し上げれば、大介護時代を乗り切っていくには、「地域の中でご縁を創造する」ことだと思っています。日本の伝統の中に、いい言葉がありました。「遠くの親戚より近くの他人」です。今度スウェーデンへ行つてまいりまして、幾つも新しい発見がございました。前から知っていたこともありましたが、よりくわしく見えてきました。

日本にも介護休業制度および介護休暇の制度がござ

います。介護休業制度のほうは合計で93日まで。介護休暇は1年に5日、介護する相手が2人なら10日まで取れます。この制度を大いに生かしていただきたいと思います。「そんなものは知るか」という企業が多いことも事実ですが、皆がこの制度を使うことによって普遍化していかなければならないと思います。

スウェーデンの介護休業は、最終的な看取りの時期に最大100日ですから、日には日本とそう変わりません。ただし、日本との違いで驚いたのは、休暇を取る場合、介護の対象は何親等とかいう親族でなくていいのです。近所の人でもいいし、親しい友人でもよいのだそうです。そして、「この人に、最期の看取りをまかせていいですか」と本人の確認が必要です。これも、個人の意思を尊ぶ個人主義の欧米のひとつのあり方です。ストックホルム市内の区役所のパンフレットにも、「私たちはいま、大勢の人の介護をしていますけれども、肉親でない人も多いです。この人たちを支援しなければいけません」とあります。この制度は「レラティブス（親族）アンド ネクスト・オブ・キン（Relatives and

Next of Kin)」。「キン」というのは「血族」で、「ネクスト」は「それに次ぐ」。血族に準ずる人々です。これには感心しました。

だけど、よく考えてみたら、日本にだって「遠くの親戚より近くの他人」という伝統がある。日本もいずれ法制化したらいいですよ。「遠くの親戚より近くの他人」法という法律です（笑）。そして、そういうご縁を結び合っていく。

私は、皆様方がそれぞれの地域の中で地域の人々と支え合い、助け合うご縁をつくっておられる。その活動に大いに敬意を表しております。無縁社会と人は言います。しかし、「糸へん」の縁の「無縁社会」がよろしくないのは、血縁や家族の縁がないと、とたんに「手へん」のほうの「無援社会」になるからではないでしょうか。家族のご縁がないと、「てへん」の援護をしない。つまり、血族でないからといって、そっぽを向いてしまう。支援をしない。ところが、だんだん血縁の人が少ない状況になっているわけです。ですから、血族支援はもちろん必要だと思いますが、血縁があらうがあ

るまいが、地域の人々を中心として「手へん」の「援」がある「有援社会」をつくっていく。援護のある、支援のある社会をつくっていく。そのことイコール、新しい日本の21世紀型の「有縁社会」、ご縁のある社会をつくっていくことになるのではないだろうかと思っております。

私はあるとき、「大介護社会だから、入学試験を見直せ」と言いました。「一浪した人は、予備校へ行くか福祉施設で働くかを選択する。福祉施設で働いた場合は、大学入試センター試験を10点とか足してもらおう」。10点が適切かどうか知りませんが、大介護時代を乗り切るために「選択したらいいい」と言ったら、ある人たちから「戦争中みたいなことを言わないでください」と怒られてしまいました。私が言いたいののは、この大介護時代を少ない人数で、どう乗り切るのかという算術の問題です。だって、昔は子どもが5人くらいいたのですよ。そして、寿命が短かった。いまは寿命が長くなって、子どもが2人しかない。長男・長女同士が結婚して、1組がどこか遠くへ行ってしまったとすれば

どうなりますか。長男や長女のそばに親が4人いる。皆、長生きです。昔は50歳にもなれば、親が死んでいく人が多かったけれども、いまは親が4人とも大体健在です。60代になって、親が90代になると、親たちは似たような年ごろだから、一斉にドドツと倒れる。これを、同時多発介護という(笑)。いや、本当なんですよ。そうなったら家族だけでできますか？ 私は、「感情ではなく、数勘定の問題だ」と言っています。

介護保険をつくるときも、保守的な方々が「日本の伝統に反する」と言いました。やはり感情的に何となく納得できなかったのだと思います。だから、「感情より勘定」と私は言っています。数勘定がわかる人ならば、家族だけではもうできないとわかるはずです。だから、地域社会なり、もっと広い社会で助け合う。これが、血縁を超えた21世紀型の新しいご縁の社会ではないでしょうか。

福祉社会へ、男女ともに働き、ともに納税

ともあれ、これからは「大介護時代」の到来であり

ます。これについては今度出る本（『大介護時代を生きる

——長生きを心から喜べる社会へ』中央法規、2012年12月）

にしっかり書いてありますから、読んでいただきたいのですが、何といっても介護にはお金がかかります。これは、「セレブレーション・アンド・チャレンジ」の「チャレンジ」の部分だと思いますが、人生の入口と出口は否応なく人からのケアを必要とします。

この財源問題をどうするか。例えば、スウェーデンなどでは男が仮に100%働いているとすると、女は大体85〜90%働いています。日本は、先ほど申し上げたように、男性の労働力率が労働年齢の人で100だとすると、女性は70ぐらいです。ここで、だいぶ違います。それから賃金。残念ながら、男と女で賃金が同じ国はありません。北欧といえども、10ポイントぐらい女性の賃金のほうが低いです。だから、男性が100もらっているとすると、女性は85か90もらっています。だけど、日本の差から見ると大した差ではないです。そして、「専業主婦」というカテゴリーがありません。つまり、たまたま、いま家にいても、それは一時的なことで、家

族に病人がいるとかの場合。そういうときに休むのは、あちらの国でも女性が多いようです。だから、常に10ポイントぐらい労働力率は女のほうが低いですが、大半が働いていて、スウェーデンでいえば所得にかかわらず30%の地方税を払います。ですから、納税者の割合が日本とは決定的に違うのです。それだけ多くの女性皆税金を納め、しかも収入が男女でそれほどは変わらない。ですから、福祉の財源があるに決まっているわけです。

私はこれまでスウェーデンへ行くと、「我が国の福祉は、女性がつくったのです」という言葉を何人もの人から耳にタコができるぐらい聞きました。私はきくと、女性が大勢働いているから、「育児休暇をつくれ」とか「男性の出産休暇をつくれ」とか「労働時間を短くして女性も働きやすいように」ということを、働く女性の側からいろいろ請求したからできたのだと。そのことを言っていると思っていました。それも事実かもしれませんが、今回、お金の面から、よくわかりました。「この国の豊かさは、女が一生懸命、ともに働い

てつくったのだ」ということがわかりました。女が必死で働いて、家庭が崩壊しないように労働時間を短くし、父親の育児参加もきちんとさせ、そして皆で働き、皆で税金を出し合って、この国をつくった。税金をこれだけ払えば、使い道について女も黙ってはいられないから、「投票率90%。女性が国会議員のほぼ半数、閣僚もほぼ半数が女性」という社会をつくり上げた。それだけ女がいれば、さらに好い循環が生じます。子どもを産んだことのある人が政権の中に多くいれば、そのことを見落とさない政策ができるのです。

日本は戦前、長いこと国会議員もずっと男性ばかりでした。ですから戦後、女性議員の最初の仕事は女性用のトイレをつくることでした。これは大学でも似たようなことがありました。その後、50年以上たちました。橋本聖子さんという自民党の女の議員さんがいらっしやいますね。参院議員現職で子どもを産んだ人は、あの方が初めてだそうです。出産予定日が、ちょうど会期中だったので、休暇を出さねばならない。ところが、休暇の理由に「忌引」とか「病氣」とか「海外

出張」とかいろいろあるけれども、「出産休暇」という項目がなかったのです。それで、事務方と一緒に頭をひねって、「まあ、ここにするよりほかはないでしょう」と選んだのが、「不慮の事故」（笑）。いや、これは橋本さんから、じかに聞いたことです。一緒の集会で彼女が話していました。あの方はその後、3人のお子さんを産まれましたが、2人目のときから「出産」という項目が入ったそうです。

「出産」という人生の大切なイベントが「不慮の事故」でくくられなければならないような政治状況になってしまっていたのです。こうしたゆがみは、めぐりめぐって、男性のほうにもさまざまなひずみとして、のしかかってくると私は思います。男女平等にならないければ、日本の社会はもうもたないところに来ているのです。

「貧乏ばあさん」から

「働くハッピーばあさん」へ

日本でいま、貧困曲線というのを書くと、男性・女性とも、年を取るほど貧困率が高くなってまいります。

これは、男性の高齢者の問題でもあります。常に女性のほうが貧困率が高く、年をとればとるほど差が開いていきます。もちろん個人差がありますが。年金の額も「国民基礎年金」という名の男女平等の年金制度でありながら、女性の支給額は月1万円ほど低いです。なぜか。発足したころ、該当年齢の女性の多くが農家の嫁でありました。安いといえども保険料が必要ですから、世帯主や長男は加入したけれども、嫁は「もう少し後からでもいい」と言われて、加入が遅れた結果がこうなっていると言われます。月々4〜5万円の年金で1万円違うというのは大きいですよ。また、女は働き続けているのに、社会保障につながらない非正規のような立場に置かれていましたから、その分の年金もやはり貧しいです。しかも年金は国民年金に比べて被用者年金の額の方が大きいのです。

私は「女一生の働き方」には、3度のすべり台がある」と言っています。最初は妊娠・出産で降りてしまう。2度目は複雑です。離婚があったり、夫の転勤があったり、子どもにいろいろ問題があったりして、すべり

落ちる。3度目は、介護ですべり落ちる。3度のすべり台で落ちて、目に見える所得や社会保障に結びつくことが大変少なく、女性は貧しくなっていく。おためごかしも含めて、女性は政府から「税金をまけてやる。保険料をまけてやる」と言われてきました。つまり、働いても低所得であれば「専業主婦」と見なされ、当面は有利であるという税制が続けられてきた。社会保険料を払わなくてよい範囲で働いたほうがトクであり、楽であるというシステムが続いてきた。国を挙げて、既婚女性の所得向上を邪魔してきたのです。当然、働く女性全体の賃金も上がりません。

男性よりも低賃金。雇用も不安定。それらのツケが老後にやっけてきます。貧乏というツケです。BBと書いて、昔はフランス的に「ベベ」と読み、女優のブリジッド・バルドーの代名詞でした。私はローマ字で読みます。「ビービー」と読んで、日本名物「貧乏ばあさん」(笑)、これがBBであります。

先年、私は『女、一生の働き方』(海竜社、2010年)という本を出しました。そのサブタイトルは「BBか

らHBへ」としました。「HB」は、働くばあさん、ハッピーばあさんであります。「貧乏ばあさん(BB)から、働くハッピーばあさん(HB)へ」。老いてこそ生き生きと働き、人様のお役に立ち、収入も得る。これこそ、これからの日本女性が目指す道です。

人生100年社会。せっかく皆が長生きできるようになった。無駄のない社会を私たちは生きています。長生きできる社会は、皆が働ける時間も長くなっているわけです。

身の周りを見渡して、少しでもお役に立つことを、飯に体が多少不自由になっても、地域のために少しでも何かしていく。できれば、地域の側も、いわゆる労働基準法による賃金でなくていいから、働いてくれた人に、何らかの張り合いになるような報酬を少しでもいからあげられる社会。そして、生涯現役で何らかのかたちで働き、お役に立ち、人々と出会い、よりよき社会を、男女ともどもに築き上げていく。そんな「人生100年社会」を目指して、私も残る余生をかけて戦いますので、皆様と一緒に頑張ります(拍手)。

〈質疑応答〉

【会場からの質問】いまの日本で女性が外で働き、男性が家を守ったとしたら、男性は長生きすると思われるですか(笑)。

【樋口講師】私は、きょうの話の中で「女が外に出て働いて、男性が家を守れ」という意味のことは一度も言っておりません。反対に、そういうことはしなくてよいと思っております。「ワーク・ライフ・バランス(work-life balance)」という言葉が言われておりますが、男性も女性も適度に働いて、仕事と生活のバランスをとっていくことです。男も働き過ぎることによって、たくさん失っています。

あえて言うならば、私が提唱しているのは、「ワーク」と「ライフ」に「ケア」を加えることです。人生の初めと終わりには、どうしてもケアを要します。また、働き盛りだって病気になるったり、失業するかもしれない。いまのスキルが陳腐化して、新しい勉強をしないと職業に就けなくなるかもしれない。そういう、より

よき自立を目指すための支援をも「ケア」と呼ぶならば、「人生100年社会」は、「ケア」という他者への関心と配慮を大事にし、それを支えるサポートをする社会です。その意味で、「ワーク・ライフ・バランス」ではなく、「ワーク・ライフ・アンド・ケア・バランス」の世界だと思っています。「男性も、どうぞ、この世界にお入りください」と申し上げたいと思います。

(ひぐち けいこ／「高齢社会をよくする女性の会」理事長、
東京家政大学名誉教授)

(本稿は2012年11月6日、東京・新宿区の
日本青年館で行われた講演をまとめたものです)